

July 4th: 独立記念日という激しいお祝い

235才の若い国であるアメリカ合衆国の国民は、その若さに相応しい興奮を示す癖があります。多くのアメリカ人は自国が世界一強いとおそらく思っていて、7月4日のIndependence Day（独立記念日）は強い愛国心をもって激しく祝う日になっています。なかでも、ワシントンDCはアメリカの首都なので、もし各地の街頭で行われるお祝いの激しさを測ることが可能であれば、多分ワシントンが愛国心の激情を最も激しく表現する街になるでしょう。

ヨーロッパからの入植者に完全に破壊されたアメリカ大陸原住民の歴史を無視すると、1776年7月4日が人々を自由にした日でした。イギリスから来てアメリカに住んでいた人達が徐々にイギリスの暴政に耐えられなくなって、革命を起こし、政治的な桎梏を脱した結果、13の植民地がそれぞれ別々の国として独立し、それらがまとまってUnited States（合衆国）になりました。

このように独立記念日は極めて重要な祝日



で、多くの祝日が“三連休”にするために月曜日に自動的に移動させられるのと異なり、7月4日に固定です。しかし、今年は7月4日が月曜日だったので、前の週の週末から祝祭が始まりました。

6月30日にはFolklife Festivalが始まりました。これは、スミソニアン美術館や博物館の多いWashington Mallの広場で行われる、世界中の民族の文化的習慣に敬意を表す祭りです。毎年テーマが変わり、今年のテーマは3つありました。

第一のテーマは、コロンビア共和国の複雑な文化で、ダンス、歌、食事、そして歴史を教えてくれるコロンビア人がいっぱい居ました。印象深い七色の光を放つドレスで躍っていた人たちを、今後、コロンビアから輸入された旨いコーヒーを飲んでいる時に思い出してしまいそうです。

第二のテーマは、平和部隊（Peace Corps）の50周年記念の祝賀会、そして第三のテーマは、私の好きなリズム・アンド・ブルースでした。Washington Mallに散らばる多くの美術館・博物館のあいだを豊潤なメロディーが暖かい風に乗って流れていました。

7月2日には、National Harborの入江沿いでUncle Sam Jamが催されました。Uncle Samは、アメリカ人なら誰でも知っている、アメリカ政府を擬人化した架空のオジさんです。バンド演奏を聴きながら酔っ払って躍る若者が、Uncle Samの奇抜なシルクハットをかぶっていました。この催し物では、人気のあるレストランが出店していたので、食事を楽しむことができました。午後2時から午後10時まで続いて、最後に大量の花火が打ち上げられました。

7月4日の独立記念日当日には、盛大なパ

レードが催されます。ワシントン市内だけではなく、様々な州の彼方此方でパレードがおこなわれます。

7月4日に車でワシントン近辺を走ろうとするのは馬鹿げたことです。その日は、朝から人が溢れていて、道も電車も大混雑。バージニア州アーリントンにある私のマンションからワシントン市内までは徒歩約20分ですので、マンション近くに車を停めてワシントンまで歩く人が大勢いました。アーリントンからワシントンへ入るためにはポトマック川にかかる橋を渡る必要があります。その橋は、独立記念日には歩行者天国となり、13階のマンションから見えた人混みは蛇のごとくに長細くクネって難民の大量脱出のようでした。

待ち焦がれた花火は、ワシントンの黄昏に放たれました。その花火が始まる前の午後中ずっと、ワシントン以外の周辺各地で花火が打ち上げられ続けており、あり得ないと思わせる程の長い時間に渡ってそれは続きました。

メインイベントのワシントンの花火が始まりました。ワシントン記念塔とリンカーン記念館のあいだのReflecting Pool（鏡のように記念塔を反映する池の由来）の上には上空で弾け散った火花が次から次に映りました。それは、上空で開花する花火とそれに伴う強烈な破裂音と共に、私も含めて参加者に畏怖を



感じさせるほどのものでした。

愛国心は奇妙なものです。宗教のように人を集めて強力にさせる良い面もありますが、宗教と同様に他人(他国)とのあいだに距離・壁を置いてしまいます。それでも、それが不信感や怒りに発展していかない限り、愛国心に端を発した競争心がいいものを生み出すのかもしれない。

独立記念日から約2週間後の7月17日、なでしこジャパンがアメリカの女子サッカーチームを倒しました。その試合を、私はアーリントンのスポーツバーで観ていました。ただのサッカーなのに、周りの皆が過激な競争心を持ち、大きなテレビ画面の前で絶え間なく叫んでいました。愛国心による競争心でした。日本では如何だったでしょうか？ 愛国心による競争心は高まったのでしょうか？



筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学(DC)で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町(現在三豊市)の国際交流協会で一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メーソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ蜚が身を焦がす」。